

---

# 運命のパイロット

ろきあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命のパイロット

### 【Nコード】

N4810T

### 【作者名】

ろきあ

### 【あらすじ】

地球を狙う機械族との最終決戦に向けて、三つの大国【天都國】  
【レツイーラ帝国】 【聖ヴィヴィス神国】 から選りすぐりのパイロットが招集された。フェイトと呼ばれる対機械族専用の機体に乗るために必要な条件は、パイロット達の技量と二人の絆の強さ。さまざまな強い絆で結ばれた彼らが挑むこの戦いでの敗北は、すなわち人類滅亡を意味する。これは、パートナーと共に命を懸けた戦いに臨むパイロットたちの恋物語。

【天都國 アマツクニ】

帝が治める、地球で最も長い歴史を誇る國。古くから魔力と異なる巫力を用いて世界と渡り合ってきた。

【レツイーラ帝国】

世界最大の領土を持つ大国。現在は第二十四代皇帝によって統治されている。

【聖ヴィヴィス神国】

最も多くの教徒を抱える教皇が鎮座する聖職者たちの國。世界各地から力ある者たちが集まってくる。

騎士と王女（前書き）

フェリス⇨アリアメリア⇨レツィーラ（18）  
レツィーラ帝国の第八王女殿下。

デューク⇨フランツ（26）

フェリスの騎士。とび色の髪と瞳。

## 騎士と王女

明日。その時に決する長き戦いは、僕らの運命どころかこの星の運命さえ左右するものとなる。幾度も駆った戦場を思い出しては、常に傍らにいるフェリスを想う。彼女は僕の母国であるレツィーラ帝国の第八王女だ。王族の彼女がなぜこんな危険と隣り合わせの場所にいるのか。それはフェリスの出生に関係がある。

彼女の母親は<最後の魔女>と呼ばれた偉大な魔女の子孫に当たる。先祖返りと言われる程の魔力を持つ彼女だが、古の魔女のように魔法を使えるわけではない。現在では魔力を持っていても操る術を知っている者は誰ひとりとして存在しないのだ。

しかし、たつた一つ。その巨大な魔力を用いる方法がある。それがフェイト。機械族と唯一張り合える戦闘用マシンに魔力を注いで操ることだ。目に見えない絆が試されるパートナーには僕が選ばれた。当然だった。僕はフェリスがまだ言葉らしき言葉を発する前から傍で仕えてきた。最初は兄王子の小姓として。それからたくさん勉強して鍛錬して騎士見習いに。誰よりも近くにいたいから近衛にまで登り詰め、晴れてフェリスの騎士になった。こうして騎士になるまでに、フェリスはいちどだけ僕が好きだと言った。ただそれは許されることではない。僕は喜びに震える心押し殺して身分の差を説く。フェリスは末の姫。僕は、中流貴族の次男。僕が成長したフェリスを愛したとしても、彼女も僕と同じ気持ちだとしても、それは決して許されないことなのだ。

それから暫くして、彼女に婚約者ができた。それでも良かったとえ危険と隣り合わせの場所を駆るとしても、フェリスがフェイトと共にゆく相手は僕。そばにいられるならなんだって良い。そんな僕の心中を罰するかのように、開戦当初は楽観視されていた機械族との戦いは壮絶を極めた。いくつもの国が亡び、何千万人も死

者が出た。戦局の悪化を見越して王女に帰国を命じようとした皇帝の意思とは裏腹に、随一の魔力を持つフェリスとそんな彼女の力を十二分に引き出す僕の逃げ道はそうして塞がれた。戦い続けた数か月。その先に待っていたのは、明日に迫る最終決戦。

僕は拠点に与えられた部屋で月明かりを頼りに愛用の剣の手入れをしていた。騎士見習いになったその日、フェリスから贈られた、彼女の瞳と同じ色をした紫苑の長剣だ。十数年、共に修羅場を潜り抜けてきた相棒。フェリス。帝国では成人とみなされる年齢にまで成長した彼女を想う。本当に妹のような存在であった彼女に恋心を抱くなんて、誰が予想しただろう。思わず乾いた笑いがこぼれた。こんな風に懐かしく思うだなんてどうかしてる。

「ほんとうに、どうかしてるよなあ……………」  
気を抜いたらフェリス、きみに愛を呟いてしまいそうだ。

\*

「きゃあああ！…！」  
「フェリスッ！つく！フェイトの損傷率74%…さすがにこの数相手にするのはきついかな…」

最終作戦。僕たちのミッションは他のフェイトが開いた突破口を振り返らずに進むこと。一度仲間が通った道とはいえ、奴らの頭数は半端ではない。こうなることは予想していたが、思ったよりも持ちこたえたほうだと思う。でもやっぱり結果は変わらないようだ。そんな都合よく物事が進むとは思ってはいなかったけど、希望を捨てていなかったと言えは嘘になる。確かに望んでいたんだ。きみと二人で、生きて城に帰ることを。

「デューク！このままじゃ道を拓けない！まだ私たちの後に続くひとたちがいるのに…！」

「まだ、大丈夫だよ。それより、フェリス。少しおしゃべりしないか？」

あらかじめ設定しておいた自動操縦に切り替えると、コックピットの背もたれを収納してフェリスと向き合う。そして、動揺する彼

女に言葉を発される前に思いっきり抱きしめた。

それこそ命がけの戦場で何してるんだって話だけど、最後まで許されてもいいだろう。腕のなかに閉じ込めたフェリスが愛おしく涙が出てきそうになった。ようやくこうして抱きしめられた。思っていたよりもずっと柔らかい体。薄い肩。こんな体で、フェイトを動かす源となっていたのか。緩く波打つ金色の髪に顔を埋めれば、僕の体中が彼女でいっぱいになる気がした。

「きみを愛してるよ、フェリス。」

フェリスが小さく息をのむ音がした。一度体を離して肩に手を置くと、綺麗な紫苑色の瞳からは止めどなく涙が流れてきた。可愛い僕がずっとずっと守ってきたお姫様。本当は、これからもずっとずっと傍にいたかった、たった一人の女の子。

「なんで…、私は！私はずっとあなたのことが好きだったのに！！どうして今更、そんなこと言うの！！」

縋り付くフェリスが愛おしくて仕方がない。このまま、この戦場を放棄して二人でどこかへ行ってしまえたら…なんて、夢のような考えが過って消えた。僕はレツィーラの騎士。フェリスが愛してやまない国を裏切ってまで選んだ道の先に、本当の幸せがあるだなんて到底思えなかった。

「本当は、何も言わずにいるつもりだったんだ。でも、僕は弱いから。もう殺せないほどに膨らんでしまったきみへの気持ちを告げないことができなくて。　　ずるい僕を許して。きみを愛すること、きみを抱きしめることで、きみを残して逝くことで、癒えない傷を負わせてしまう僕を。」

「なに、言ってるの…？デュークは死なない！あなたは私の騎士よ。私の傍にずっといるって言うてくれたじゃない。そのために死に物狂いで勉強して鍛錬して騎士になったんでしょ？私、知ってるのよ。あなたが影でずっとずっと、私を守るために頑張ってきたことだって全部！」

どんとどんと叩かれる胸はちっとも痛くないのに、心臓のあたりを

掴まれたようにずきずきと痛む。これが喜びなのか、切なさなのか、悲しみなのか、愛情なのかも分からない。ただ苦しいほどのフェリスの想いが直接流れ込んでくるようで耐えられなかった。

ああ、僕は。僕はこんなにもきみを愛していたのか。

「フェリス、フェリス、フェリス…、僕は、きみと共に在るから。こんな事になるなら、きみを好きになったあの時からこうして抱きしめて離さなければよかったなあ。」

忘れないように。離れないように。再び抱きしめれば、彼女はぎゅっと僕の背中に手を回す。このまま世界が終わってしまえばいいのに。こんな時でさえも、自己中心的なことを考えてしまう自分がひどく虚しい。死なないで、置いていかないと繰り返し小さな背中を摩る。この子はこんなにも他人のために必死になれるのに。身分なんかよりも、人としてフェリスと僕は釣り合わなかったのかもしれない。僕はフェリスを愛した。彼女もずっとずっと応えてくれた。たぶんそれがすべてなのだと思う。

「フェリス、いい子だから言うことを聞いてくれ。ぜんぶ終わったから、必ず迎えに行くから。僕を信じて僕のことだけ考えて待っていて。」

白い額に唇を落とす。主である王女に対する嘘は騎士として許されない。けど今は、ただ一人の男として、愛するひとに嘘をつく。決して褒められたものではないけれど、きみのためなら何だっていい。

「デューク、お願いやめ…」

首に手刀を打ち込めば、フェリスは呆気なく気を失った。そんな彼女を寝かせてからそっと唇に口づける。頬を温かいなにかが伝った。もっともっと守ってあげたかった。きみが幸せになるのを見届けたかった。

「フェリス、」

続く言葉はいらなかった。フェリスに届けばそれでいいから。言葉を飲み込んで、僕は彼女を救命ポットにそっと寝かせて蓋をしめ



た。転送するのはフェリスの愛する母国レツイーラ。感傷に浸る間もなく起動スイッチを押す。光の粒となって消えていくフェリス。そのひとつひとつが、消えていく面影さえもが愛おしい。きみが目覚めるとき、きつと世界は変わっている。新しい時代を、きみは生きるんだフェリス。そう思えば、自然と笑みがこぼれた。きみが幸せに生きる未来。僕がいない未来は必ず希望に満ちたものになる。

さあ、行こうか。

たとえもう二度と会えなくなつたとしても、この心だけは永遠にきみのそばに。フェリス。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4810t/>

---

運命のパイロット

2011年5月22日21時11分発行